

開講科目名 / Course	診療補助技術論（基礎編）
ターム・学期 / Term・Semester	2026年度 / Academic Year 1 学期 / First
開講区分 / semester offered	1 学期 / First
単位数 / Credits	1.0
学年 / Year	2
主担当教員 / Main Instructor	石丸 智子
担当教員名 / Instructor	秦 さと子、石丸 智子、田中 佳子、神矢 恵美、後藤 壮登
必修・選択 / compulsory subject	必修
講義形態 / Class Type	演習
授業回数	15
科目の目的と概要	基礎看護技術において、身体侵襲を伴う援助技術や医学的検査および治療の際に付随して発生する対象の苦痛や不安をできるだけ軽減し、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるための支援についての知識・技術の修得を目的とする。各々の技術の背景にある原理や科学性について学び、技術の適応や応用を考えながら技術演習を行う。
到達目標	1. 診療に伴う治療・処置・検査等における援助技術についてシミュレータを用いて実施できる。
DPとの対応	3.看護の基盤となる専門知識・技能
授業計画	授業は原則2コマ続きで実施する 01-02. オリエンテーション・感染防止の技術 : ガウンテクニック、滅菌手袋の着脱 03-04. 排泄援助技術 (1) 一時的導尿 05-06. 排泄援助技術 (2) 持続的導尿、24h蓄尿 07-08. 呼吸・循環を整える技術(1) : 上気道吸引、喀痰検査 09-10. 呼吸・循環を整える技術(2) : 吸入(酸素・薬液) 11-12. 症状・生体機能管理技術: 血液検査(採血) 13-14. 与薬の技術(1) : 静脈注射、点滴、輸液ポンプ 15. 与薬の技術(2) : 皮下注射・筋肉内注射 * 詳細は別途資料配布
その他の授業の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教員による講義は、オンデマンド配信を基本とし、科目開講期間中、見たいときに繰り返し閲覧できる。</li> <li>・ 自己学習力と主体性を育成するため、e-learning (Nursing Skills) による事前課題、授業での課題事例に関する個人ワークを課している。</li> <li>・ 学内演習時間は、個人による学習を仲間との討議で深めるためにグループ活動を中心に行う。</li> <li>・ 学生の技術内容について、ICT (SIM System, Google Workspace) を活用して客観的な評価と課題の明確化につなげる。</li> <li>・ グループ演習の成果をもとに事前課題レポートを修正しながら、技術の習得につなげる。</li> </ul>
時間外学修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事前課題 : 該当授業に関するNursing-Skillsの小テストを授業前日までに個人学習する。担当教員が事前に提示する課題事例に関するレポートを作成し提出する(8h)。</li> <li>・ 事後学習 : グループ演習の成果をもとに事前課題レポートを修正し再提出する。また、授業時間内のみの学習では技術修得は困難であり時間外に反復学習が必要である。方法としてNursing-Skillsを用いて自己学習する他、事前のAppointmentにより教員による技術指導も可能である(4h)。</li> </ul>
評価方法と評価割合	<p>事前・事後課題、授業態度、技術試験を総合して評価を判定する。</p> <p>配点は事前課題 : 20%、事後課題10%、授業態度 : 10%、技術試験 : 60%とする。</p> <p>技術試験が6割未満、あるいは事前課題、事後課題、授業態度、技術試験の合計が6割未満の場合は単位認定不可とする。</p> <p>授業態度はグループ演習での授業参加度や学生デモンストレーションへの参加度を評価する。原則100%出席とし、遅刻、欠席は減点対象とする。</p> <p>20分までの遅れは遅刻とし、超える場合は欠席として取り扱う。また、遅刻3回で欠席1回とみなす。</p> <p>* 詳細は別途資料配布</p>
テキスト	系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[2,3] (医学書院) 看護技術プラクティス 第4版 (Gakken)
参考書	
履修する上で必要な要件	

その他		
教員の実務経験	有・無	有
	内容	秦さと子：病院の看護師 石丸智子：病院の看護師 田中佳子：病院の看護師 神矢恵美：病院の看護師 後藤壮登：病院の看護師
教員以外で指導に関わる者の実務経験	有・無	無
	内容	
実務経験をいかした教育内容	<p>熟練した看護実践力を活かして、看護技術の原理や科学性の理解を促進させる。  対象に対して安全で安楽な技術の適応や応用を考える示唆を与えながら支援を行う。</p>	